幻想殺しと神機使いと魔法少女

Hiro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻想殺しと神機使いと魔法少女

【Ｎコード】
Ｎ４７６３Ｗ

【作者名】
Ｈｉｒｏ

【あらすじ】
アラガミの討伐任務を終えた神薙ユウは見たこともない宝石を見つける。しかし、その宝石が原因で異世界に飛ばされてしまった！？神機使いと魔法少女と幻想殺しを持つ少年が交わる時新たな物語が始まる！
注意）この小説は『幸せ』を望む者達のタイトルを変更しただけです。

プロローグ

???「ジュエルシードの設置完了しました。」

???「あの世界からはどうやって奴を連れてくる？」

???「メイガスが向かっていますので問題はないかと思われます。」

???「それでは『プロジェクトG』を実行に移す。新たな世界を創造するために」

嘆きの平原

コウタ「いや～今日の任務も楽勝だったね～♪」

アリサ「任務が終了したからといって油断しないで下さいよ。この前ハンニバルに殺されそうになったんですから…」

ソーマ「くだらねぇ」

ユウ「まぁまぁ」

本日の任務が終了し、フェンリル極東支部第一部隊の面々はいつも通りの他愛ない会話を繰り広げていた。
本日の任務の内容は、シユウ三体とヴァジュラ二体の撃破であった。ヨハネスフォンシックザールのアーク計画の阻止や大車ダイゴによるアナグラ襲撃事件、第一部隊の元隊長である雨宮リンドウの救出といった、様々の問題を解決してきた神薙ユウ率いる第一部隊のメ

ンバーにとって、本日の任務は非常に楽な物であった。

コウタ「そういや、リンドウさんがアナグラに帰ってきてもうすぐ一ヶ月になるけどさ、リンドウさんアナグラ帰還記念パーティーでもしない？サクヤさんも喜ぶと思うしさ。」

アリサ「コウタにしてはなかなか気の利いたことが言えますね。」

ユウ「良いと思うよ。それで、そのパーティーで具体的にどんなことをするんだい？」

コウタ「ん～、皆で飯食ったり、バガラリー見たり、アリサがバニースーツを着たり…ゴフッ！！！」

アリサ「なんで私がそんな格好しなければならないんですかッ！！！それに私はバガラリーなんか見たくありません！」

コウタ「バガラリーを馬鹿にすんなよ！あれには男のロマンが詰まってんだよ！」

ユウ「まぁまぁ二人とも落ち着いて、バンドをやるのはどうかな？ソーマは何か良い案はある？」

ソーマ「あるわけねぇだろ…」

ユウ「じゃあ、具体的な話はアナグラに戻ってからってことでいいかな？…あれ？」

アリサ「ユウ、どうしました？」

ユウ「何か宝石みたいな物が落ちていたんだけど…どうしよう？」

アリサ「一旦、榊博士に見てもらった方がいいんじゃないですか？」

ユウ「そうしとくよ。ありがとうアリサ。」

アリサ「い、いえお気になさらず…／／／」

ソーマ「とっとと帰るぞ」

ソーマの一言でアナグラに帰還する第一部隊の面々、アナグラの外周部で分かれた後、神薙ユウは外部居住区に向けて移動していた。かつて、大車ダイゴが引き起こしたアナグラ襲撃事件により生命を落とした少女の墓へと。そこで、ポケットに妙な違和感を感じた神薙ユウは手を入れ、中にあるものを取り出すと禍々しい光を放っている先程の宝石があった。

ユウ「何だこれ！？」

更に周囲の景色が歪み始めていく。そして、目を覆う程の強い光が放たれた後、その場に誰一人として存在していなかった。

？？？「転移成功。ジュエルシードは神薙ユウを巻き込み本来の世界へと戻って行きました。」

？？？「物語が開始される少し前の時間軸へ飛ばしましたが、問題はありませんか？」

？？？「余裕を持たせてやった方が良いだろう。」

？？？「了解しました。」

第1話

なのは「二人とも気をつけてね」

アリサ「なのはこそ気をつけなさいよ」

すずか「早く事件が解決してくれるといいんだけど…」

高町なのはは友人であるアリサ・バニングスと月森すずかの二人と別れ、帰路についていた。

最近、海鳴市で行方不明者が続出していることから、小学校の授業は午前中で終わり早めの帰宅を促されていた。また、大人によるパトロールも定期的に行われていたが、行方不明者の数が減少することはなかった。

なのは「行方不明の人達大丈夫だといいんだけど…」

自分より他人を思いやる事の出来る少女であるなのはは、この事態に心を痛めていた。行方不明者の家族は心配しているだろうし、犯人には一刻も早く行方不明者を解放して欲しかった。

なのは「お父さんもお兄ちゃんもパトロールに出かけているし…」

なのはの父親である高町士郎や兄である高町恭也もパトロールに参加していた。二人とも剣術に関して圧倒的な実力を持っているので心配無用なのだが、それでもなのはの心中は穏やかでなかった。

なのは「早く事件が解決して欲しいけど…あれ？」

家の前に何かがある。何があるんだろうと恐る恐る近づいたなのはが見つけた物は…倒れている少年だった…

なのは「ふぇぇぇぇ！！！どどどどういうことなの！？」

なのはは非常に混乱していた。どうして自宅の前に倒れている人間がいたのか全く理解出来なかった。また、見たこともない服装や倒れている少年の横に少年の身長と同じくらいの大きさを誇るケースがあったことも一役買っているのかもしれない。

なのは「だ、大丈夫ですか！？」

桃子「どうしたのなのは？なんでうちの前に倒れている子がいるの？」

なのは「と、とにかくなんとかしなきゃ…」

士郎「ただいまって何が起きれてるんだ！？」

なのは「お父さんこの人行き倒れ助けなきゃ…！」

士郎「ああそうだなとりあえず家に入れよう…」

恭也「ただいま…どういうことだ？」

美由紀「ただいま…これどういう状況？」

高町家の人が全て揃った所で、倒れている少年を家に入れることにした。その際、少年の横にあるケースも運ぼうとしたのだが、あまりにも重すぎたので士郎と恭也の二人掛かりでなんとか運べたので

ある。そこで、少年を客室に運び布団を敷いて寝かせると高町家による定例会議が開かれたのだった。

士郎「ではこれより高町家による定例会議を始める。まず、この少年を最初に発見したのはなのはだったよな？それはどういう状況だったんだ？」

なのは「私も皆と同じで家に着いたらこの人が倒れていたの…それだけ」

士郎「そうか…まぁ家の前で倒れていたことは一旦置いといて皆に聞きたいことがある。この少年の服装が流行っているのか？」

恭也「そんなわけないだろ。服装はともかくなんであんなにでかい腕輪を付けているんだよ。リストバンドやブレスレットより遥かに大きいし、あんなのを付けていたらすごく不便じゃないか。」

美由紀「まぁ確かに腕輪を含めて彼の服装は見たことも聞いたこともないわね…」

士郎「それに彼の隣にあったケースは一体何だ？いくらなんでも重過ぎるだろう…」

なのは「ふぇ？あれって楽器とかが入ってるんじゃないの？」

士郎「いや…いくらなんでも楽器にしては重すぎる。楽器なら一人でも十分運べるからな。」

桃子「話せば話すほどあの子についての謎が深まるわね。もしかして、未来人だったり。」

士郎「それはないだろう。ともかく、彼が起きたら詳しい話を聞けばいいだろう。これにて高町家による定例会議を終了する。」

高町家の定例会議が終了した中、倒れていた少年こと神薙ユウは目を覚ました。

ユウ「此処は…何処だ？外部居住区の人達にでも助けられたのかな？」

そう考えた神薙ユウだが、直後にそれは違うということを理解した。あまりにも清潔過ぎるのだ。外部居住区に住む人達の生活水準は非常に低く、それによるフェンリルへの抗議デモもよく行われている。しかし、上流階級の人間の家とも違う。何が起こっているのか全く理解できない神薙ユウは混乱していた時に、部屋のドアが開かれた。入ってきたのは、全く見知らぬ人達であった。

士郎「ああ、目が覚めたんだね。家の前で倒れていたからビックリしたんだよ。」

ユウ「あの、あなたは？それにここは？」

士郎「自己紹介がまだだったね。私の名前は高町士郎。ついでにいうと此処は私の家だ。」

桃子「高町桃子よ。」

恭也「高町恭也だ。」

美由紀「高町美由紀よ。」

なのは「高町なのはです。」

ユウ「神薙ユウです。ご面倒をお掛けして申し訳ありません。」

士郎「気にしなくていいんだよ。困っている時はお互い様だからね。」

ユウ「ありがとうございます。あの…アナグラはどちらにありますか？」

士郎「穴倉？どういうことだい？」

神薙ユウは強烈な違和感を覚えた。いくらなんでもフェンリル極東支部をアナグラと呼ぶことを知らない人はいないと思ったからだ。

ユウ「あの、ここは外部居住区ですよね？」

士郎「外部居住区？ここは海鳴市だよ。」

外部居住区を知らない？それに此処は海鳴市という所らしい。これで、神薙ユウは確信した。ここは、自分のしっている世界ではなく、異世界であるということを。それと同時に士郎から質問された。

士郎「所でどうして君は家の前で倒れていたんだい？」

ユウは考えた。今自分の身に起きていることを正直に伝えても、頭のおかしい人間だと思われる。ならば、嘘をつくしかないという結論にたどり着いたユウの行動は早かった。

ユウ「僕は旅をしているんです。様々な場所を旅して思い出を作るために。ですが、三日前から何も食べていなくて、海鳴市に着いてからも同じ状況が続きまして」

士郎「それで倒れてしまったと？」

ユウ「…はい」

我ながら苦しすぎる言い訳だと思った。しかし、目の前の高町一家は想像以上のお人好しだったことから事無きを得た。そのことに、ユウは罪悪感を覚えた。

士郎「ところで、君の服装や腕輪、ケースは一体どういったものなんだい？」

ユウ「これは、両親が僕に作ってくれたものです。」

士郎「君のご両親は今何をしているんだい？」

ユウ「両親は十年前に事故で亡くなりました。」

士郎「…すまなかった。」

ユウ「…いえ、気にしないで下さい。」

士郎「話題を急に変えてすまないが、君は泊まる場所は用意しているのかい？」

ユウ「いえ。ですが野宿はよく行っていますので大丈夫です。」

士郎「ならば、しばらくこの家にいなさい。」

ユウ「でも、何もしていないのにご迷惑をお掛けするのは…」

士郎「じゃあ、家事やパトロールを手伝って欲しい。これでどうだい？」

ユウ「分かりました。お言葉に甘えさせていただきます。」

第2話

上条「どうしたらいいんだろうな…」

御坂美琴から北極海で無くしたストラップを渡されて別れた後、自身が住んでいる学生寮に向かっていた上条当麻は呟いていた。
その原因は一時間程前にの御坂美琴から告げられた一言である。

御坂「ただし、こんどは一人じゃない。」

今回のラジオゾンデ要塞による事件は上条当麻を狙ったものであり、フィアンマが起こした第三次世界大戦の時と同様に上条当麻個人が標的にされたのである。
ラジオゾンデ要塞を何とか退けた上条達だったが、レイヴィニア・バードウェイからハワイがグレムリンの手によって新たな戦場になると告げられた。そのため、新たな戦いの場となるハワイには一人で向かう予定であった。
だからこそ、この事件とは無関係であるはずの御坂美琴の一言は上条当麻にとって理解出来なかった。御坂美琴は学園都市に七人しかいない超能力者の第三位である。超能力者は一人で軍隊とも渡り合えるとも言われており、戦力としては非常に頼もしい。しかし、上条当麻にとっては超能力者の前に一人の女子中学生に変わりない。
自分の不幸に他人を巻き込むことを良しとしない上条当麻にとって、この申し出は断るべきものだった。そのまま、口論になるかと思われたが深夜という時間帯もあり、後日また会うことにしたのだ。

上条「どうして御坂の奴、いきなりあんな事を言ったんだろうな…」

溜息をつきながら、学生寮に戻る最中、突如暗闇から一人の女性が

現れてきた。

???「上条当麻さんですね？」

上条「あんたは？」

???「唐突な話で申し訳ありませんが、あなたに助けてもらいたい人物がいます。一緒に来てくれませんか？」

上条「分かった。案内してくれ。」

上条は不審に思いながらもその申し出を受けることにした。何故、見ず知らずの人間が自分の名前と幻想殺しの事を知っているのか疑問に感じ、女性が魔術師ではないかと考えたが、それを追求する気はなかった。

上条当麻は、困っている人間がいれば、相手の立場や親交の有無に関わらずに行動しその手を差し伸べる事が出来る。だからこそ、今此処で余計な事を聞くべきではないと結論を出した。そうしている内に、路地裏に着き、マンホールの前で女性が立ち止まった。

???「このマンホールの下にあなたに助けてもらいたい人間がいます。」

そういって、女性はマンホールの蓋を開ける。

上条「結構深そうだな…」

マンホールの下を覗いた上条はそう呟く。ライトやその代わりとなるような物も何も持っていない上条は何か灯りをともすような物を持っていないか女性に聞くために後ろを振り向こうとした。

その瞬間、上条は背中を女性に押され、あまりにもあっけなくマンホールの下に落ちていった。それから、女性はマンホールの下を覗き込んだ後、端末のような物を取り出した。

???「こちらメイガス、幻想殺しの転移に成功しました。引き続き任務に取り掛かります。」

そう告げた女性は、何事もなかったかのようにその場から立ち去っていった。

アナグラの外周部で一度別れた第一部隊の面々は、支部長室に呼び出されていた。

コウタ「ユウがまだ来てないけど、何かおかしくね？」

アリサ「そうですね。ソーマは何か知っていますか？」

ソーマ「知るか。」

ペイラー「そのことなんだけどね。落ち着いて聞いてもらいたい。彼の腕輪の反応が突然消えてまったんだ。また、反応が消える直前に未知の高エネルギー反応が探知されたんだ。」

驚きを隠せない第一部隊のメンバー達、ユウはアナグラの外周部で別れたはずだ。アラガミに襲撃されたとは考えられない。万が一、アラガミが外周部まで進入した場合は、ゴッドイーターである彼らに連絡が入るはずなのだ。その上、ユウは最強のゴッドイーターと称される程の実力を持っている。そう易々とアラガミに殺されるはずがないのだ。

ツバキ「第一部隊の隊長が急に行方不明になったことが、他の人間に知られたら支部全体が混乱する。だからまずは、お前達が奴が消えた近辺を調査しろ。いいな？」

第一部隊のメンバーは一連の話を聞いた後、すぐさま支部長室を出ようとした。その時だった。

ペイラー「外部居住区に未知の高エネルギー反応？しかも、彼の腕輪の反応が消失した場所と同じ所に？」

第一部隊のメンバーはペイラーの報告を聞くと同時の支部長室を飛び出し、現地へ向かった。そこでは、空間が歪むといった謎の現象が起きていた。

ソーマ「…何だこれは？」

アリサ「分かりません。でも、ユウの失踪と何か関係があるんじゃないでしょうか？」

コウタ「…てかなんだか、歪みがますます激しくなってない？」

コウタの言葉通り空間の歪みがますます強くなっていく。それと同時に、歪んだ空間から何かが吐き出されるように出てきた。それは人間だった。正確に表現すると、ツンツン頭の学生服を着た少年だった。

アリサ「…に、人間？」

ソーマ「…どうなってやがる。」

コウタ「と、とにかく倒れているみたいだし、助けたほうがいいんじゃない？」

呆気に取られているアリサとソーマだったが、コウタの一言で冷静になり、少年をアナグラの医務室まで運んだ。

それから一時間後、ツンツン頭の少年こと上条当麻は目を覚ました。

上条「…あれ、ここは？」

ペイラー「気がついたみたいだね。」

そこには、眼鏡を掛けた男が立っていた。

上条「あなたは？それとここは何学区ですか？」

ペイラー「私の名前はペイラー榊。それとここは『アナグラ』だよ。」

上条「アナグラ？なんですかそれ？」

嫌な予感がする。そう感じた上条の不安は間違ってなかった。

ペイラー「どうやら君はここことは異なる世界から来たようだね。」

上条「…異なる世界？それってまさか…」

ペイラー「ようこそアナグラへ！いや～素晴らしい研究対象が来てくれたものだ♪」

徐々に自分の置かれた状況を理解した上条。それからの彼の行動は

早かった。

上条「不幸だあああああああああああ！！！」

上条当麻の代名詞とも言えるセリフがアナグラ内に響き渡ったのであった。

プロフィール（前書き）

遅ればせながらはじめまして。Ｈｉｒｏと申します。
駄文ですが見ていただけると幸いです。

プロフィール

神薙ユウ
新型神機使いであり、フェンリル極東支部第一部隊のリーダー。
最強のゴッドイーターと称されるほど圧倒的な実力を誇る。
誰にでも好感を抱かせる柔らかい物腰と、的確な作戦運用ゆえ仲間からの信頼は厚い。
しかし、一方で女性からの行為に疎いといった欠点も持っている。
上記のように、普段は温厚な性格であるが、人の死といったものに敏感であり、大車ダイゴによるアナグラ襲撃事件の際には、激情家としての一面を覗かせている。

神機
バスターバレード
『神の如き者（ミカエル）』
雨宮リンドウの救出作戦を経て、神薙ユウの持つ神機が変化した姿。
そのため、非常に謎の多い神機である。
現在、確認されている全ての種類のアラガミを倒しその肉体を捕食しているため、神機の形状は何度か変化したことがある。
特徴としては、現存する神機の中で最も高い攻撃力を誇り、捕食形（プレデターフォーム）態の際には、通常の神機より二周り大きくなる。
この神機の中のオラクル細胞は通常のオラクル細胞より活性化していて、非常の制御が難しく、人工的に開発された神機でもないため、神薙ユウの専用神機となっている。

アサルト
『ファランクス　極』
全ての場面において優秀な性能を発揮する。
速射性能にも優れており、一体多数の戦いにも対応可能である。

シールド

『剛汎用シールド　真』

非常に使いがってのよい盾。

物理的な衝撃に対する高い耐性に加えて、アラガミが行う属性攻撃に対する耐性も高い。

また、神機の変形をスムーズに行うための改良も加えられており、スムーズに戦闘行動を取れるようにメリットがある。

第3話

高町士郎との話し合いの結果、ユウは居候として高町家で暮らすことになった。
その際、玄関に置いてあった神機入りのケースを片手で持ち上げ、客間に持って行く時の高町家の人間は、有り得ない物でも見たかのような反応を取っていた。ユウはそれが、何のことだか全く理解できず首を傾げていた。
神機の入ったケースを運び終えた後、高町家で昼食を取ることになった。
ユウはその食品を見て驚きを隠せなかった。
食卓に並んでいる食べ物の全てが、自分のいた世界では見たこともない物だったからだ。
厳密には、全く見たことがないわけではない。アナグラのターミナルを通してみたデータでそれらしき食べ物を見たことがある。
しかし、それはアラガミが現れる前に限られていることであり、実物を見るのは初めてだった。
実際、ユウのいた世界では慢性的に食物が不足しているといった問題に悩まされている。
それに、食べ物もレーションや品種改良をおこなったジャイアントとうもろこしなど限りなく少ない種類の食べ物しかない。
ユウはここが異世界であることは理解していたが、目の前の出来事を受け入れることに少しの時間を必用とした。
そのことを、不思議に思った高町桃子は苦手な物でも入っているのかとユウに質問した。
しかし、ユウは初めて見る食べ物だと正直に答えた。その答えを聞いた高町家の人間が抱く疑問は全て同じだった。「一体どんな生活をしていたのか」と…。
ユウの返答に対して質問したい衝動に駆られた高町家だったが、こ

れは聞いてはいけないことなのかと考え、誰も質問しなかった。
初めて食べる食事にユウは自分でも意識していないうちに、涙を流していた。
そのことに慌てた、高町士郎は「大丈夫か？」と声をかけた。ユウは自分が涙を流していることに気づき、慌てて涙を拭きその場を取り繕った。
食事が終わり、四郎からこの町の施設について一通り説明を受けた後、ユウは外出することに決めた。
それからは、まさしく驚きの連続だった。
まず、建物が全く荒れていない。アラガミのような世界で荒廃していたらそれはそれで問題なのだが…
次に人の多さに圧倒された。謎の行方不明の件もあり、外を出歩く人間は少なかったのだが、それでもユウにとっては人が非常に多いと感じられた。他にも、人々には笑顔があることから自分が居た世界とは何もかもが違うと改めて実感した。
ユウのいた世界は、建物は荒れ果て、支部を一歩出れば荒廃した大地がどこまでも広がっている。
人の数もお世辞にも多いとは言えず、人々の笑顔などあるはずもなかった。
自分たちの世界もアラガミが現れる前はこの暮らしが普通だったのかと考え、ユウは一人で呟いた。
「平和か…」

第４話

上条の代名詞とも言えるセリフがアナグラ内に響き渡った後で、上条はペイラーからこの世界についての説明を受けていた。その際、口頭だけでは伝わり辛いだろうと言われモニターの映像を見ながら説明と受けることになった。
まず、最初にこの世界における人類は絶滅の危機に晒されているということを告げられた。
その原因としてアラガミという生物が影響していることが挙げられた。
アラガミはオラクル細胞という単細胞生物の集合体である。
オラクル細胞は、捕食を行いその情報を取り込み自己進化を行うといった特徴を持っている。
その進化速度は異常なまでに早く、通常の生物が非常に長い時間を掛けてその体を変化させていくこととは比べ物にならないほどに速いのである。この世界では西暦２０５０年代にオラクル細胞という物が発見された。
一例として、オラクル細胞が発見された少し後にミミズ型のアラガミが発見され、その後獣型のアラガミが発見されて、オラクル細胞が発見された半年後には一つの大陸が滅んだことが挙げられる。
また、オラクル細胞は有機物や無機物を問わず捕食を行う等の特徴を持ち、マグマや核廃棄物まで捕食した記録もある。しかし、それらを取り込んだアラガミはそのエネルギーに耐え切れず消滅したとの報告もある。
アラガミは捕食したものの情報を取り込み、それから有益な情報を取捨選択し体を進化させていく。
あらゆる物を捕食するアラガミ故に、戦車の姿を模したアラガミも発見されている。
アラガミには、既存の兵器が一切通用しないといった問題もある。

これらのことから、人類はアラガミが出現する前とは比べものにならないほど減少しており、人間以外の生物も殆どが絶滅している。
このまま、絶滅を待つしかない人類だったが、当時の生化学企業であったフェンリルがアラガミに唯一対抗できる武器である神機を開発し、それを扱うゴッドイーターと呼ばれる人達により人類の絶滅を逃れることが辛うじて出来たのである。
しかし、ゴッドイーターの数は決して多くはなく、アラガミとの戦いで命を落とすゴッドイーターも少なくない。その上、誰でもゴッドイーターになれるわけではないため、慢性的な人材不足に陥っている。
上条が現在居るフェンリル極東支部（通称アナグラ）も絶対に安全が保障されているわけではない。フェンリルの支部にはアラガミ装甲に覆われた外壁があり、アラガミの襲撃を防ぐといった役割を持っているが、それでもアラガミが侵入してくる事もあり、その度に被害を被っている。
上条はペイラーから一連の説明を受けた後、全身から力が抜けていくのを感じた。
あまりにも残酷過ぎる世界だと思ったからだ。
上条自身、普通の人間が一生掛かっても遭遇するような事件に「不幸」にも巻き込まれてきて、その解決のために尽力してきた。
それによって救われる人間がいることに喜びを感じていたし、自分の「不幸」によって苦しんでいる人間を助けることが出来たことを誇りに思っていた。
しかし、自分が訪れた世界はあまりにも絶望に塗り潰されていた。
この事実は上条当麻という人間にとっては地獄そのものであった。
それから少し経った後、ペイラーは上条が居た世界についての説明を求めた。
上条は、自分がいた世界についての説明を始めた。
上条は日本の中にある学園都市という場所で暮らしているということを話した。

学園都市について説明を求められた上条はそれについての説明を始めた。
学園都市とは（通称学生の町）人口が２３０万人おりその８割が学生で構成されていること、そこでは人為的に超能力といった力を開発しており、様々な能力を使う人間が存在している。
また、学園都市は外の世界より科学技術が２０年以上発達している。
異世界で魔術の存在を隠す必要はないと考えた上条は、魔術の存在についてもペイラーに伝えた。
上条の話をペイラーは非常に興味深そうに話を聞いていた。
上条とペイラーの話しが終わると、黒髪の女性が入ってきて上条の今後についての話し合いがされることになった。
それまで上条は、現在行方不明になっている神薙ユウの部屋に留まる事になった。
秘書と思われるような女性の案内に従い、上条は支部長室から出て行った。

ペイラー「ユウ君がいきなり消えたこととやタイミングを見計らったように上条君がこの世界に来たのは何だか作為的な物を感じるねぇ…」

ツバキ「それでは、神薙ユウも異世界に飛ばされてしまったということですか？」

ペイラー「その可能性は非常に高いね…上条君も何でこの世界にきたのか全く理解していなかったことから、何者に狙われていると考えた方がいいかもしれないね…」

第5話

???「メイガス、任務の進行状況は？」

メイガス「４０％といった所です。現在は、コピーした『残骸』をアラガミに捕食させて様子を見ましたが、能力の発現に成功した模様です。最終調整が済み次第、上条当麻の居る世界へ転送します」

???「アーサー、そちらの状況は？」

アーサー「管理世界から連れて来た原生生物を海鳴市に放っていますが、神薙ユウとは未だに接触していません。神薙ユウと接触した後、アラガミを送り込む予定です」

???「上条当麻の覚醒を促すためには、別世界の法則を経験させることが必須となる…『協力者』が何を考えているのか未だに理解しかねるが、私達は自らの理想を叶えるために今この場にいるのだ」

メイガス「『協力者』の思惑は分かりかねますが、幻想殺しの正体や次元転移技術など我々の知りえない情報や技術を持っていることは確かでしょう」

アーサー「上条当麻の能力が開放されれば新たな世界が創造される。誰もが望む平和な世界が…」

???「彼らはその力を『幻想創造』（イマジンクリエイター）と呼んでいたが名前などどうでもよい。その力さえあれば、失ったものを取り戻せるのならば話しは簡単だ」

三人が話している最中、暗闇の中から一つの影が唐突に現れた。

???「…協力者か」

???「君たちに伝え忘れたことがあるんだけど、アラガミと魔法少女についてのデータを提供してほしいんだ」

???「何のために？」

???「君が知る必要はないよ」

???「…了解した」

用件を伝えた『協力者』はその場から一瞬で消えた。

第6話

ユウは海鳴市において行方不明者が続出しているという話を士郎から聞いて、なのはの登校の付き添いをすることになった。
なのはの付き添いで小学校に向かっている途中、二人の女の子がなのはに話しかけてきた。

アリサ「おはようなのは」

すずか「なのはちゃん、こちらの方は？」

なのは「神薙ユウさん。訳あって一緒に暮らしているんだけど…」

ユウ「始めまして、僕の名前は神薙ユウ。よろしく」

アリサ「アリサ・バニングスよ」

すずか「月村すずかです」

アリサ「いきなりこんなこと聞くのはあれだけど…そのケースには何が入ってるの？」

アリサとすずかの目を引いたのはユウが担いでいるケースだった。

なのは「あ、それ私も気になる」

ユウ「そういえば、なのはちゃんにも話してなかったね。このケースの中にはヴァイオリンが入っているんだ。僕自身、ヴァイオリンを弾ける訳じゃないんだけどね…」

ユウの説明に一応の納得をしたなのは達。
なのはを学校まで送った後、ユウは図書館まで向かった。
この世界の情報を収集するためには、図書館へ行くことが最適だと考えたからだ。
図書館に入ったユウは、一人の少女を見た。
その少女は車椅子に乗っており、本棚の上段にある本を取ろうとしていた。
ユウは少女が取ろうとしていた本を取り…

ユウ「この本でいいかな？」

はやて「おおきに！」

少女は笑顔で感謝の言葉を述べる。

ユウ「どういたしまして」

はやて「しっかし、けったいな格好しとるな～」

大きすぎる腕輪や担いでいるケースのせいで明らかに目立ちすぎていた。

ユウ「色々事情があってね…」

はやて「そうなんか…」

ユウ「気にしなくていいよ。えっと…」

はやて「はやてや。八神はやて」

ユウ「はやてちゃんか。僕の名前は神薙ユウ」

はやて「ユウさんか」

ユウ「僕は今から色々調べなきゃいけないから…」

はやて「何について調べたいんや？」

ユウ「歴史についてなんだけど…」

はやて「それならあっちのコーナーがおすすめやで」

ユウ「ありがとう。助かるよ」

はやて「困ったときはお互い様やで。そんじゃまたね」

ユウははやてと別れた後、この世界の歴史について調べ始めた。
自分の世界の歴史と取らし合わせた結果、多少の相違点はあったものの大体の歴史は同じということが分かった。
図書館で調べているうちに小学校の終わる時間が近づいて来たので、なのはを迎えに行った。
なのはと帰っている途中に謎の殺気を感じたユウは、なのはと帰宅した後に忘れ物をしたという嘘をつき謎の殺気を感じた地点に向かった。

ユウ（アラガミか？いや、違う。アラガミならこの一帯が無事であるはずがない！）

アラガミは有機物、無機物問わず捕食を行う。

だからこそ、アラガミが出現した場所は荒れないはずがないのだ。
ユウが周囲を警戒していると、何も無かった場所から突如見たこともない生物が出てきた。

???「グオオオオォォォ！！！」

ユウはケースから神機を取り出し応戦しようとする。
しかし…

ユウ「開かない！？」

ケースが開かない。この世界に転移する際に故障でもしたのだろうか。
ユウは辺りを見回し、武器に使えそうなものを探す。

ユウ（使えるか？）

ユウは電柱に近づき、それを引き抜いた。
そして、引き抜いた電柱で謎の生物に向けて思い切り叩きつけた。

???「ギャアアア！！！」

ユウ「効いている！？なら！！」

ユウはとどめを刺すためにもう一度電柱を持ち上げる。
しかし、ユウがとどめを刺す前に謎の生物は姿を消した。

ユウ「消えた？」

謎の生物は姿を消して、神薙ユウは呆然としていた。

第7話

翌日ペイラーに呼び出された上条は支部長室へ向かい、そこでフェンリル極東支部第一部隊のメンバーを紹介された。

コウタ「俺の名前は藤木コウタ。よろしく！」

アリサ「アリサ・イリーニチラ・アミエーラです」

ソーマ「ソーマ・シックザールだ…」

上条「（ソーマって奴は何か雰囲気が一方通行に似てるよな…）」

上条は元に居た世界の学園都市第一位の能力者を思い浮かべていた

コウタ「本当は後の三人も紹介したいんだけどね～…」

上条「どういうことだ？」

アリサ「実は、残りのメンバーである雨宮リンドウさんと橘サクヤさんはアラガミの討伐任務に出ていて、リーダーである神薙ユウは行方不明になっているんです…」

上条「行方不明？」

ペイラー「彼が行方不明になった状況はあまりにも不可解でね…もしかしたら、君と同じように異世界に飛ばされた可能性があるかもしれないんだ」

上条「そうなんすか…」

コウタ「話の腰を折って悪いんだけどさ…もしよかったら、あんたがいた世界のことを教えてほしいんだけどさ…」

アリサ「私も教えていただいても大丈夫ですか？他の世界の話に興味がありますので」

上条「別にかまわないけど…」

ペイラー「早速打ち解けてくれたみたいで何よりだよ。所で聞き忘れていたんだけど、上条君が居た世界の学園都市という場所では能力開発を行っていたみたいだけど、君自身はどのような能力を持っているんだい？」

上条「俺には能力開発で得た力は無いんすけど、ただ…」

ツバキ「支部長。定例会議の時間ですから話しの続きは後ほどお願いします」

ペイラー「仕方ないねぇ。上条君、また後で話を聞いてもいいかな？」

上条「分かりました」

そう言ってペイラーとツバキは支部長室から出て行く

これからどうしようかと考える上条にコウタが言った

コウタ「外部居住区でも案内しようか？」

アリサ「この世界のことについてまだまだ分からないことも多いでしょうし、どうですか？」

上条「そんじゃあよろしく頼むぜ」

外部居住区に向かいながら、自分の居た世界について簡単な説明をする上条

上条の話を聞いた三人の反応はそれぞれ異なっていた

コウタ「アラガミのいない世界か…」

アリサ「転移系能力者ですか…」

ソーマ「（くだらねぇ…）」

外部居住区に到着してこれからの予定について話をしようとしている途中で、三人のゴッドイーター達に連絡が入った

上条「どうしたんだ？」

コウタ「任務が入ったみたい。悪いけど後は一人で外部居住区を見ておいてくれよ」

上条「分かった。気をつけてな！」

三人と別れて外部居住区を一人で回ることになった上条は、周囲の建物を見て思った

ボロボロの建物、外を出歩いている人も少なく、外にいる人間の目に生気は宿っていなかった。

上条「……」ギリ

ペイラーからこの世界の状況について一通りの説明を受けていた上条だったが、自分の目で見て改めて実感した
あまりにも残酷な世界だと…

上条「…とにかく色々と見て回るか」

再び歩こうとする上条だったが、突如聞こえた叫び声でその歩みを止めた

上条「何だ！？」

男性「アラガミだぁぁぁ！！逃げろぉぉ！！！」

男の声が聞こえてから、家の中にいたと思われる人々が一斉に飛び出した
上条の目線の先には、見たことも無い生物がいた
それはまるで悪鬼の様な見た目をしていた

オウガテイル「グオォォォォォ！！」

逃げ惑う人々の中で上条は逃げ遅れた一人の少女を見つけた
オウガテイルが少女に向かっているのを見た上条は、少女の下に駆け出した
そして、少女の下まで辿り着くと少女をその場から逃がした
その場にいるのは上条とオウガテイルのみとなった

上条「（ペイラーっておっさんは、アラガミはオラクル細胞という集まりだって言ってたけど、俺の右手は通用するのか…？）」

幻想殺し（イマジンブレイカー）
それは異能の力であるならば前作問わず問答無用で打ち消す力
しかし、アラガミは出鱈目な存在ではあるが生物であり幻想殺しが通用するかは分からない
オウガテイルから逃げようと思った上条だが、自分が逃げたら他の人が襲われると考え、その場に踏みとどまることを決意した。

上条「効いてくれよ俺の右手！！」

上条はオウガテイルまで全力で駆け出し右の拳で殴りつけた

バキン

上条の右手が触れた部位が崩壊する

上条「効いた！？なら！！」

間髪居れずに上条がオウガテイルを殴る
ガラスが割れる音が何度もしてオウガテイルの肉体を崩壊させていく
そしてオウガテイルの肉体は余す所なく消滅した
その場に座り込む上条だったが、背後からもう一体のオウガテイルが近づいていたことには気付かなかった
オウガテイルは上条を殺すために大口を空けながら襲い掛かる
しかし、オウガテイルの一撃は少年に届くことは無かった

ブシュゥゥ！！

上条が後ろを振り返るとそこには黒髪の男が立っていた

リンドウ「おう少年。大丈夫か？」

第一部隊の元リーダーこと雨宮リンドウがいた

第8話（前書き）

少しばかりスタイルを変更させていただきました。

第8話

『神薙サイド』

翌日士郎に呼び出されたユウは高町家の道場にいた。

士郎「ユウ君、剣道の経験はあるかい？」

ユウ「いえ、全くありません」

士郎「そうか。でも海鳴市も今は物騒だからね。護身術くらいは身に着けて置いた方がいいんじゃないかな？」

ユウ「確かにそうですね」

剣道の経験は全くないが、身体能力という点では人間を凌駕しているユウ。

護身術を身に着ける必要はないが、せっかくなので学んだほうがいいと思い士郎の提案を受けた。

ちなみに道場には高町家の全員がいた。

士郎「まずは打ち込んで来なさい」

士郎から渡された竹刀を持ったユウに告げた。

ユウは人間と戦った経験は無い。

人間とは比較できないような化け物とは日々戦ってきたが…

ユウ「（とにかく打ち込めばいいのか…）」

士郎は剣術の達人であり並の人間ならば圧倒できる程の腕前を持っている。
しかし、神薙ユウは『並』の人間ではない。
二人の様子を高町家の人間は見学していた。

恭也「剣道の経験はないと言っていたくせに随分と様になってるじゃないか」

美由紀「隙も見られないしね」

なのは「お父さん…ちゃんと手加減してくれるといいんだけど…」

桃子「大丈夫よ」

なのは達が話している間にユウが動き始めた。

士郎「（初めてにしては筋がいいな）」

ユウが四郎に向かって打ち込む。
（竹刀を狙ってだが・・・）

ドガァァ！！

「「「「「え？」」」」」

士郎の持っている竹刀が砕け散った。
しかも、竹刀を振り切る速度が常人とは明らかに異なっていた。

ユウ「すいません。竹刀を壊してしまって…」

状況が理解できず謝罪するユウに高町家の面々は呆然としていた。

『上条サイド』

ペイラー「さて、説明してくれるかい？」

上条は支部長室に呼び出されていた。
リンドウから上条がアラガミを拳だけで消滅させたという話しを聞いたペイラーは、上条に問い詰めていた。

上条「多分、俺の幻想殺しが効いたんだと思います」

ペイラー「幻想殺し？」

上条はペイラーに幻想殺しの事を説明した。
ペイラーは何かを考え込み…

ペイラー「つまり、幻想殺しがアラガミに通用しているということは、オラクル細胞の構成には何らかの異能とやらの力が関係しているということなのかな？」

上条「多分…」

ペイラー「オラクル細胞の対抗手段はオラクル細胞しかないと思っていたけど、これは実に興味深いね」

コウタ「なぁ博士。それってさ、コイツのその幻想殺しの力ならアラガミを一撃で殺せるって事なのか？」

ペイラー「触れただけで、アラガミを崩壊させることが出来るから

神機より強力だろうね。おそらく、彼の力をアラガミ装甲に使うことが出来るならば、それだけで確実な安全が約束できるだろうね」

アリサ「そんなことが出来るんですか？」

ペイラー「学園都市という特殊な機関でも解析することが出来なかったんだから難しいだろうね…」

ソーマ「そんな簡単なもんでもねぇだろ」

コウタ「やっぱ無理なのか…」

上条「悪い…」

コウタ「いやいやアンタが気にすることじゃないよ」

アリサ「そうですよ」

ペイラー「後で君の身体を検査させてもらってもいいかな？」

上条「はい」

リンドウ「話しは終わったんですか？」

ペイラー「そういえば、まだ君を紹介していなかったね」

リンドウ「雨宮リンドウだ」

サクヤ「橘サクヤよ」

上条「上条当麻です」

リンドウ「博士から話しは聞いてる。大変だと思うが頑張れよ」

上条「ありがとうございます」

リンドウ「ところでさ…学園都市って所のビールは上手いのか？」

上条「え…俺は未成年だから飲むことはないんすけど…」

サクヤ「リンドウ。上条君が困ってるじゃない」

リンドウ「はは、悪ぃ悪ぃ。学園都市のビールはどんな味なのか気になってな」

上条「ははは…」

第9話（前書き）

主「非常に遅くなってしまい申し訳ありません」

ユウ「遅過ぎて神機がお腹すいたって言ってるみたいだよ」ジャキ

主「本当に悪かったって！ただ、ちょっとネタ切れしてただけで…」

ユウ「駄目に決まってるだろう」

グシャバキゴクン

ユウ「主の代わりに謝ります。ごめんなさい。更新ペースは出来るだけ急がせますので、よろしくお願いします」

第9話

『神薙サイド』

なのはの実家の翠屋の手伝いを始めたユウ。

士郎「手馴れているけど、ユウ君はこういった経験があるのかい？」

ユウ「いえ。経験はありません」

桃子「今度はケーキの作り方でも教えましょうか？」

ユウ「お願いします」

ユウを見ているなのはが、姉の美由紀に尋ねる。

なのは「ユウさんって一体何者なのかな？竹刀も粉々にしちゃったし…」

美由紀「言われてみればそうよね」

恭也「分からないことを気にしても仕方ないだろう」

美由紀「そうね。それにしても、ユウ君が手伝うようになってから、お客さんが増えたわよね？」

なのは「うん」

実際、ユウが翠屋で働くようになってから店に訪れる客が増えた。

（元々、翠屋を訪れるお客の数は多いのだが…）
働いているユウ本人は、とても充実していると感じていた。
彼が普段から行っているアラガミ討伐のような仕事とは全く異なり、
人々の笑顔が見れる仕事に憧れを持っていた。
その様子を見ていたなのは達は…

なのは「楽しそうだね…」

美由紀「そうね」

恭也「ああ…」

数日後、士郎からお小遣いを貰ったユウは海鳴市をぶらついていた。
海鳴市を歩き回り、改めてここが平和な世界であることを実感する。
同時に彼は、自分の存在がこの世界にとって異物であることを理解していた。

ユウ「（コウタやアリサ、ソーマにサクヤさん、リンドウさんは元気かな…？）」

立ち寄ったスーパーで、家庭菜園用の野菜の種を発見するユウ。
自分の世界に持ち帰ったときに、上手くいけばペイラーがこの種の品種改良に成功して、食糧危機の問題の解決に繋がるかもしれないと考えたユウは、全ての小遣いを使って野菜の種を購入した。
野菜の種を大量に持って帰ったユウを見た高町家の全員は唖然としていた。
翌日、図書館に出向いたユウははやてに合う。
少女と話していく内に、少女がどういう人間か理解したユウ。
八神はやては、過去に親を亡くしており天涯孤独の身だった。
孤独に苛まれる少女。神薙ユウには少女の気持ちが痛いほどよく分

かった。
彼も幼い頃に両親をアラガミに殺害されており、天涯孤独の身となっていた。
しかし、神薙ユウの境遇が珍しいというわけではない。
彼のいた世界で、親のいない子供は吐いて捨てるほどいる。
また、子供自体もアラガミに殺されるのが当たり前の世界である。
だが、それは彼が居た世界の話である。
このような平和な世界で、少女を孤独のままにしておくのはあまりにも忍びない。
そう考えたユウは、少女の一つの提案をする。

ユウ「友達を作ってみない？」

はやて「友達？」

幸い、彼が世話になっている家には、同い年くらいの少女がいる。
また、少女自体も非常に優しく友人になるには持って来いの人材と言えるだろう。

はやて「でも私、学校に行ってないのに友達なんて出来るんかな…？」

ユウ「大丈夫。僕も協力するから」

彼は早速、高町なのはに連絡した。

『上条サイド』

上条「失礼しました」

リンドウとサクヤの自己紹介を受け簡単な話をした後、上条はコウタ達と一緒に支部長室から出て行った。

ペイラー「それで、先程のアラガミが出現した状況についてだが…ツバキ君、確かに当時の報告によるとアラガミは発見できていなかったんだね？」

ツバキ「はい。オウガテイルといえど、防衛班がアラガミの姿を見逃すなどありえません」

リンドウ「つまり、アラガミは突然その場に現れたってことか？」

ツバキ「信じ難いが、そうとしか考えられん」

ペイラー「それに、オウガテイルが出現する前に、上条君が現れて時と同じようなエネルギー反応が見られたんだ…」

アナグラのエントランスに集まった上条とアリサ達。
そこで、上条は神薙ユウについて聞いていた。

上条「なぁ、そういや神薙ユウってどんな奴なんだ？」

コウタ「一言で言うと…いい奴だな！」

上条「いい奴？」

コウタ「今は、第一部隊の隊長だけどちょっと前は一緒にコンビ組んでたし、バガラリーの面白さもよく分かってるし」

上条「ちょっと待て。バガラリーって何だ？」

上条の言葉に待ってましたと言わんばかりに、バガラリーについて熱く語るコウタ。
地雷を踏んでしまったと後悔する上条と溜息をつくアリサ。
そんな、三人の下に一人の少女が向かってきた。

リッカ「お、君だね？異世界から来た人は？」

上条「そうだけど…」

リッカ「あたしは楠リッカ。神機のメンテナンスを担当してるんだ」

上条「俺は上条当麻。高校生をやってる」

上条の姿に気付いたのか、ガラの悪そうな二人の男が上条の下にやってくる。

コウタ「ゲッ！」

シュン「何がゲッだよコラ！」

カレル「とにかく、そいつが例の異世界から来た奴か？」

アリサ「ええ、そうですけど…」

シュン「ふーん。俺は小川シュンだ」

カレル「カレル・シュナイダーだ」

上条「上条当麻です」

二人を皮切りに、エントランスにいるメンバーが上条達の下へ続々と向かってくる。
そこで、エントランスに居るメンバーが次々と自己紹介を行う。

タツミ「大森タツミだ。よろしく」

ブレンダン「ブレンダン・バーデルだ」

ジーナ「ジーナ・ディキンソンよ」

カノン「あ、あの…台場カノンって言います」

アネット「アネット・ケーニッヒです」

フェデリコ「フェデリコ・カルーゾです」

ミユキ「ミユキ・スカーレットです」

ゲン「百田ゲンだ。元神機使いって言った所だな」

ヒバリ「竹田ヒバリです。よろしくお願いいたします。」

エントランスに居るメンバーの自己紹介が終了する。
そこで、上条はあることについて考える。

上条「（この世界に来て思ったけど、この世界の女の人は過激な服装が普通なのか？いやでも、竹田さんや台場さんは普通の服装だしな…）」

露出の激しい服を着ている神機使いの女性を見て上条はふと思う。
（青髪ピアスがこの場にいたら狂喜乱舞するのかも知れないが…）
それに、自分が居た世界だってオリアナ・トムソンのように露出が激しい服を着た女性もいたことから、そういうものなのだろうと自己完結する上条。
アナグラの面々による上条当麻への質問攻めが行われようとした瞬間、アナグラ内に警報が鳴り響く。
いち早く、受付に戻っていたヒバリが連絡を行う。

ヒバリ「外部居住区にアラガミ出現！？しかも多い…皆さん！！」

ヒバリの一言にその場にいたゴッドイーター達は、素早くその場から立ち去って行った。

上条「どうしたんだ！？」

ヒバリ「アラガミの襲撃です！危険ですので上条さんは自室に戻っておいて下さい！」

リンドウ「どうしたんだ？」

一足遅れてリンドウとソーマがエントランスに到着する。

ヒバリ「外部居住区にアラガミが出現しました！お二人は援護に向かってください！」

リンドウ「行くぞソーマ！！」

ソーマ「ああ…！」

その場から、外部居住区へ向かおうとする二人。
しかし、エントランスに突如ヴァジュラテイルが出現した。

上条「なっ…！」

突然の事態に呆然とする上条。
そんな上条を無視して、リンドウとソーマはヴァジュラテイルに襲い掛かる。
極東支部でトップクラスの実力を誇る二人の攻撃は非常に素早く、一瞬で決着がつくと思われた。
しかし…

ドォン！！

突如として、ヴァジュラテイルの身体から膨大な電撃が迸る。
予想外の行動だったが、二人は何とか踏みとどまり敵の攻撃を回避した。

ソーマ「どうなってやがる…」

リンドウ「ヴァジュラテイルはあんな事が出来るなんて聞いたことねぇぞ…」

本来、ヴァジュラテイルはオウガテイルがヴァジュラの死骸を捕食して、姿が変質し、その能力の力の一部を扱えるようになる。
落雷の発生、尻尾に電気を纏わせる、飛ばす針に纏わせて射出するが主な能力である。
しかし、ヴァジュラテイルはその身体から電撃を発生させたのだ。
持ちえるはずが無い能力。

ヴァジュラテイル「ガァァァァ！！！」

尻尾を相手に向けて、針を射出する体制に入るヴァジュラテイル。
ヴァジュラテイルの行動パターンが、頭と身体に叩き込まれている
リンドウとソーマの対応は早かった。
しかし、ヴァジュラテイルが放ったのは、光の筋だった。
行動が早かったおかげで、ヴァジュラテイルの攻撃を何とか回避した二人、しかしその背後には大きな穴が開いていた。
リンドウとソーマは異質すぎるヴァジュラテイルに驚きを隠せない。
上条は、ヴァジュラテイルが打ち出したものに見覚えがあった。

超電磁砲（レールガン）

上条が知っているものより、速度も威力も数段落ちていたが、それは間違いなく、御坂美琴の代名詞というべき技であった。

ソーマ「まずいな…」

リンドウ「ヴァジュラより強いんじゃねぇかあれ…」

ヴァジュラテイルはリンドウとソーマを睨みつけ、いつでも襲いかかれるようにしていた。
そのせいで、ヴァジュラテイルは自らに向かってくる一人の人間に気付くのが遅れた。

上条「うおぉぉぉぉ！！」

上条は右手でヴァジュラテイルを殴りつける。

バキン！！

一撃で完全に消滅させるまではいかなくても、隙を作るには十分な攻撃だった。
リンドウとソーマが凄まじい速度で、ヴァジュラテイルに迫り神機を振り下ろす。

ソーマ「おおおおぉぉ！！」

リンドウ「うおおおおぉぉ！！」

ザン！！

ヴァジュラテイルの身体が引き裂かれて消滅する。
窮地を脱した上条達。
一時間が過ぎて、アラガミの襲撃も沈静化する。
再びエントランスに集まるゴッドイーター達。
最初に口を開いたのは上条当麻だった。
上条「皆…聞いて欲しいことがある」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4763w/

幻想殺しと神機使いと魔法少女

2011年11月16日17時37分発行